



CONTENTS

■ 巻頭言		
「物だけでなく心のサポートを」		
(福井誠)	…P.1	
■ 現地活動報告		
フィリピン (田原寿子)	…P.2~	
ベトナム (田原寿子)	…P.3~	
■ 日本事務局から		
活動報告 (事務局)	…P.4	
■ 支援で育つ子どもたち	…P.5	
■ お知らせ	…P.6	

物だけでなく、心のサポートを

ベトナム戦争当時、ミャオ族(モン族)の一部が、インドシナの共産化を防ぐアメリカ政府に協力し、ラオス愛国戦線と戦った。アメリカの撤退後、ラオスの共産化によって、ミャオ族は難民と化し、4 万人以上が、カリフォルニア州、ミネソタ州などに、難民として受け入れられることになった。現在約 21 万人がアメリカに在住しているという。その後のミャオ族について、調査ドキュメンタリーを見る機会があり、しばし考えさせられるところがあった。

アメリカ移住によって彼らが提供された家は、それまで見たことも使ったこともない、ガスレンジ、シャワーといった近代設備の住宅である。またスーパーに買い物に行くが、並べられた肉は、一様にパッケージに詰め込まれ、何の肉かもわからずに買って食事をする。人種の垣塙とは言いが、まったく言葉が通ぜず、政府から基礎言語教育を提供されてもなかなか身につかない。だから、新天地での就職活動もなかなかうまくは進まない。結果として、不安定な生活基盤の中で子育てを余儀なくされ、難民として新境地は切り開いたが、希望はなく、困窮を深めるというような内容であった。

日本の難民受け入れの状況は、90 年代からミャンマーなどアジア地域を中心に受け入れるようになったようであるが、その数は欧米諸国に比し、数十人とわずかである。実際に難民申請する人の数は、1500 人以上もいるのであるが、難民と認定され受け入れられる人の数はわずかである。認定されなかった難民が強制送還され、本国で死刑となる悲しい結末もあったそうだが、問題は、アメリカの例に見られるように、難民と認定された人もまた、果たして、日本の社会に適応してきちんとした暮らしをしているかどうか、ということだ。

生活に困っている人々に何かをしてあげたいと思う気持ちは、わからないわけではない。そのような善意がやはり基本にあって、助け合いが始められると思うのであるが、物質的に援助するだけでは、援助が援助とならずに終わってしまう現実もある。つまり、物的に物事を保証されても、実際上の様々な困難を乗り越えていく個人の目的意識が引き出されることと、そのような個人の志をサポートする心理的な支援も必要なのである。

ただ生きることができる、というのではなくて、目的を持って生きることができる、そのようなケアが、ど